

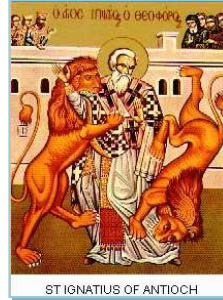
10月17日

殉教者主教イグナシウス

Ιγνάτιος

(35頃～100頃)

～使徒教父、聖ヨハネの弟子～



「ST. IGNATIUS
OF ANTIOCH」

人名辞典などでは、アンティオキアのイグナティオスと表記され、イグナティウス・デ・ロヨラと区別される。

彼はシリアのアンティオキア教会の主教であり、使徒教父の一人である。また使徒聖ヨハネの弟子であるとされるが、パウロやペトロの弟子であったとする説もある。

イグナシウスは「テオフォロス」(神を持っている)と呼ばれ、まだ迫害のもとにあり、教理も確立していない初代教会にあって、単一の主教制度の確立を求めていった。すなわち、主教が承認する教えのみを異端に対する正当なものとし、典礼も主教の許可したのもののみとしていった。こうして彼は、主教の権威を強調していった。

しかし、ローマ皇帝トラヤヌスの治世下において、イグナシウスは死刑を宣告されてしまう。そして彼が司牧していたシリアからローマまで船で護送されることとなる。しかし彼は、自分の理想であるキリストと、殉教によって一致することが最高の望みであり、喜びであると感じた。彼を乗せた船はトルコの海岸にそって進んでいったのだが、その先々で多くの信徒が彼に会いにやってきた。彼は途中寄港した町で、信徒たちに対する励ましの手紙を書き送る。

手紙は、エフェソス、マグネシア、トラレス、フィラデルフィア、スミルナの教会宛てに、そして個人的に親しくしていたスミルナの主教ポリュカルボスに向けて、最後にローマの教会の信徒たちに向けて送られた。これらの書簡は「使徒教父文書」の中に収められている。

ローマに着いたイグナシウスは、競技場で猛獣に噛み殺されたという。

彼は公同の教会(Καθολικὴ Ἐκκλησία)という言葉をもっと最初に用いた。何よりも主教の権威を大切に、「町の教会は主教を中心にしなければならぬ。主教なしには何もしないように」と言っていたという。

また、聖餐のパンとぶどう酒を不死の薬とする特異な解釈も持っていた。(Y)

<特禱>

全能の神よ、あなたはみ力と恵みによって、聖なる殉教者主教イグナシウスに苦難に勝ち、死に至るまで忠実である生涯を与えられました。どうか恵みをもってわたしたちを強め、どのような迫害にも耐え、主イエス・キリストのみ名を忠実に証することができますように、主は父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられます。

アーメン